

木曾川



木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思えます。

今回は木曾川の三派川に囲まれた川島町を特集。
川中島である川島町の歴史と現状、
現在進行形の事業をクローズアップします。
今回から大正改修をシリーズで追跡します。

INDEX

ふるさとの街・探訪記《川島町》

◆川島の歴史は乱流を繰り返す木曾川とともに

AREA REPORT

◆渡船から橋梁へ、相次ぐ整備事業で生まれ変わる川島町

気ままにJOURNEY

◆美しき川中の島は爛漫の花模様

歴史ドキュメント

◆木曾川上流改修、その前史

TALK&TALK

◆長良川改修の道のり／西田 創 氏

民話の小箱

◆ヤロカの大水



川島の歴史は乱流を繰り返す 木曾川とともに

木曾川の三派川に囲まれた川島町は、大小二つの島からなる川中島。洪水の度に大きく流れを変える木曾川とともに、その歴史を重ねてきました。現在の川島の姿が定着したのは、大正十二年のこと。大規模な治水事業により、川島町は自然あふれる美しい町に。現在は「快適で潤いのある町づくり」を目指して、多彩な事業を展開しています。



木曾川空撮 北派川・本川・南派川を三派川という



江戸時代木曾川流路

川島町の歴史は水とともに

岐阜県羽島郡川島町は、岐阜県の南端部、岐阜市の南東10kmに位置し、木曾川の本流と町の南北を流れる二つの支流に囲まれた大小二つの中州からなる町です。東西は約6km、南北は約2kmの卵状の形をした平土地です。「川島」という地名が示すように、この町は大河の中に浮かぶ島。その昔、無数の中州で形成されていたこの地域は、大雨の度に大きく流れを変える木曾川の影響を受け、中州の水没、新生など、地形の変容を余儀なくされてきました。

昭和五〇年、弥生時代の遺跡として伊八島水没遺跡が発見されています。この遺跡は川島大橋上流約1km、松倉町伊八島の木曾川河川敷にあるため、水位の上昇によつて水没することから、「水没遺跡」と命名されました。壺型土器などの各種の土器や棒状の木器などが発掘されており、貴重な考古資料となっています。農耕文化が進むにつれて「ムラ」が形成された古代。この地方の豪族羽栗ノ臣は尾張地方の諸豪族を統合し、小国家を

形成しました。その後、大和朝廷による中央集権が進むと、羽栗ノ臣は朝廷と手を結んで国造となり尾張国を統括。当時の川島は、尾張国葉栗郡河沼郷に属していました。この地名からも想定できるように当時の川島は沼や川に覆われた不毛の地。雨期ともなれば収穫は皆無となり、風水害や大飢饉の記録とともに救済の事例なども残されています。



松倉伊八島河床遺跡より出土(弥生時代の末期)

広野川事件

平安時代になると河川改修の利害ともなう広野川事件が勃発しています。「日本三大実録」によると、この発端は貞観七年(八六五)十二月二十七日、尾張国司が、「昔、広野河(木曾七流と呼ばれた木曾川の呼称の一つ)は美濃国に向かつて流れていたが頃年、河口壅塞して、尾張の国へ流れて、出水の毎に大被害を受けるので、河口を掘開してもと流れに戻したい」と太政官に請願して工事を始めたことによりです。

松倉を拠点にして天下人の階段を

室町時代末期、尾張国で頭角を現した



松倉城跡と見なされる「松倉御屋敷」には樞太神の石碑が立つ。

この工事は河川の利害を協議し美濃国・尾張国とも承知の上ではじめられたようですが、貞観八年(八六六)七月、美濃川は七〇〇余人を率いて河口を襲来し流血に及びました。これは広野川の河道が旧河道、すなわち美濃側へ復することによつて不利益を受けることになるため、美濃国各務郡大領各務吉雄が完成間近の工事現場を襲撃したものです。

快適と潤いの町をめざって

明治四年、廢藩置県の施行により、川島の村々は岐阜県に所属。同十二年には羽栗郡に所属し、同十二年には川島村が成立。幾多の変遷の後、昭和三年、川島村に町制度を施行して、現在の町域が確定しました。

明治以降の川島の道のりは、まさに治水事業とともに。明治政府は明治二十年から二五年の歳月をかけて木曾三川下流改修を実施しました。反面、上流域にある川島町は、依然堤外地に残されたまま。この下流改修による成果を目の当たりにした上流域の人々は、官民ともに上流改修への請願運動を開始。その声はようやく政府にも届き、大正十年、木曾川上流改修が着工されました。

この上流改修の重点の一つは、川島地域の乱流整理。古来より出水のたびに乱流する河状を安定させるため、木曾川に流入する数多くの支派川を締め切り、河身を木曾川本川および南派川、北派川の三本に限定して、流水の正常化を図ろうとしたのです。こうした河身整理のため、狭窄部は拡幅、掘削し、支派川は掘削土で締め切り、護岸水制を築造し、流路の整備された木曾川本川、南派川、北派川が誕生しました。

この結果、川島が現在の姿に定着し、水害は激減しましたが、三斗島や渡島などの水没による移転など、大きな犠牲を払っています。昭和二十八年発足の木曾川改修総体計画は、川島地内の乱流区域を整え、木曾川兩岸の水衝部の護岸水制を整備するも



河田渡船場跡碑

田や畑などの耕地に恵まれない川島の各村では、正農は成り立たず、地勢を生かした桑園が発達し、古くから養蚕業が営まれていた。江戸期になると養蚕業は徐々に隆盛し、寛政年間(一七八九〜一八〇〇)になると、松原島に御蔵入物問屋鈴木富右衛門なる人物が登場し、

そんな状況下、美濃側にも新堤防が築堤されました。慶長六年(一六〇二)、奥平氏は加納城主となるや、各務から葉栗・中島両郡に至る木曾川筋に堤防を築造。しかし、慶長十一年(一六〇六)から三年に渡つての洪水は美濃側に壊滅的な被害をもたらしました。そこで時の将軍徳川家康は、美濃代官岡田将監に、美濃側堤防の修築を命じ、慶長十三年(一四年)に工事は行われました。この美濃側堤防は籠尾と呼ばれるもので、岡田将監が独自の工夫をこらした苦心作。要所には二重三重の堤防を造り、水勢を弱めるための猿尾という突堤が無数に造られました。その一方、

堤防の両側には松並木を植え土砂崩れを防ぎ、馬踏は街道を兼ねました。この堤防は現在の美濃側堤防の木曾をなすもので、猿尾は「将監猿尾堤」とも呼ばれ、現在もところどころに、その原形をとどめています。

美濃・尾張の築堤と川島輪中

天正一四年(一五八六)六月の洪水は、木曾川に河道をも変動させるほどの大規模なものでした。この洪水により、木曾川の本流は従来の前渡(岐阜県各務原市)以前の流路を変えて川島地内を流れ、笠松方面へ。以後、木曾川は現在の河道に定着しますが、この河道をもつて美濃両国の国境と定め、川島各村も美濃国に編入されたと伝えられています。

こうした水害を防御するため、豊臣秀吉は天正年間に木曾川堤防を築造。文禄二年(一五九三)には、木曾川堤防をはじめ、尾張諸川の修築を開始し、同四年、慶長元年(一五九六)の洪水に際しては、新堤防を築造しています。しかし、天正、文禄の築堤はあくまで尾張国中心。美濃側の堤防は尾張側に比べ貧弱なため、人々は困窮を極めていました。

織物の町川島と渡船交通

この川島を輪中と呼ぶか否かは諸説がありますが、少なくとも水防という同一の意志を有する共同体であった歴史的事実は見逃すことができません。猿尾：水制の一種。猿の尾に似ていることからこう呼ばれた。馬踏：堤防の天端(人馬のおおる所)

も堅固な御囲堤が築造されました。こうした慶長の築堤によつて、濃尾兩國の堤防は整備され河道は一定したものの、下流域での氾濫は後を絶たず、村々では輪中を結成するようになりました。また、この濃尾の両堤の整備と同時に、川島の村々は木曾川本流の堤外になる一村路となり、小綱島・松倉島・河田島・松原島・渡島・嘉左エ門島・小屋場島の八つの島がそれぞれの名のごとく、洪水ともなれば本流に浮かぶ島となり、水禍との戦いを宿命づけられたのです。

濃尾一向宗発祥の地

親鸞上人は浄土真宗の開祖。専修念仏の教えを広めるため全国を行脚していますが、関東から京都への帰途尾張国葉栗郡河沼郷に立ち寄り寄っています。時に嘉禄元年(一二二五)のこと。上人に帰依する河野九門徒は、木瀬早庵(岐南町)を建立し、ここに上人を迎え一向宗の布教伝道を図ったといわれています。以来、河沼郷は、濃尾一向宗発祥の地として繁栄。その後、二五〇年を経て蓮如人この地方の旧跡を巡歴し、さきに洪水で流失した草庵を再建しました。現在の喜瀬草庵(笠松町中野)は、これにあたるといわれています。

ので、現在もなお継続して工事は進められています。この改修事業に伴い道路の整備も進み、交通の中心は渡船から橋梁に。平成五年からは岐阜県のマイロード事業の一環として、平成川島橋の工事が進められています。現在、東海北陸自動車道、国営木曾三川公園「世界淡水魚園(仮称)」、上下水道など大型プロジェクトが次々と展開中。平成三年からは快適で潤いのある川島町をめざして「全町公苑化のまちづくり」をスタートさせています。



木曾川本川(平成川島橋と東海北陸自動車道)

- 参考文献 『川島町史』通史編川島町発行 『岐阜県地名事典』角川書店発行 『川島町町勢要覧』川島町発行 『ふる里かわしま』川島町発行 『戦国時代と川島』川島町ふるさと史料館発行

渡船から橋梁へ、 相次ぐ整備事業で 生まれ変わる川島町

●渡船が唯一の交通機関●
本曾川の中洲に位置する川島町は、古来から渡船が他村への唯一の交通機関として、日常生活に密接な関わりをもってきました。

中山道的那加・細畑駅から本曾川の中洲である川島を経て、尾張国へ渡る古道は早くから開けており、その沿道に牛子渡（川島町松倉）、梅の木渡（川島町笠田）、河田渡（川島町河田）、大野渡（川島町松原）などが設けられていました。この他にも、村民のために造られた鹿ノ子渡（後、神明になる）川島町小網、松本渡（川島町小網）、わたり渡（川島町渡）などが発達していました。また、農民が他村への出稼ぎのみに利用する「作渡場」が季節的に設けられていました。

●渡船から橋梁へ●

人々の足として、はたまた物流の要として大いなるにぎわいを見せた渡船交通。こうした渡船場を数多く有する川島町は、下流域と上流域の物資の交易の場として成長し、地場産業である「川島の絹」も、渡船交通によって栄えています。また、美濃・尾張両国の生活風習や文化

が行き交うことにより、川島町は独自の発展を遂げました。

しかし、明治以降の治水事業や交通網の整備によって、渡船は衰退の一途をたどり、橋梁に主役の座を譲り渡すようになりました。

①河田渡船
河田渡船の始まりは鎌倉時代。美濃河田と尾張河田を結ぶ河田往還道の一環として開けました。この河田渡船は北方渡船（笠松渡船）と内田渡船（犬山）の中間にあることから、中街道と称され、大変重要視されてきました。この渡船場は戦場となることもしばしばで、承久の乱（一二二二）には、鎌倉勢北条義時の一軍が一宮からこの渡しを渡って美濃攻めに向かっています。戦国の世の天正十二年（一五八四）には豊臣秀吉が長久手の合戦の戦後処理に利用し、慶長五年（一六〇〇）関ヶ原



旧河田橋の架設



河田橋

の合戦に際しては、徳川方の武将池田輝政・浅野長政・山内一豊などがこを渡って、河田島の渡河戦に臨んでいます。江戸期に入り、享保十二年（一七二七）、一宮村（一宮市）に三八市が開催されると、幕末には浅井接骨医の繁盛にもなっており、一層のにぎわいをみせました。

この渡船も昭和五年、愛知・岐阜両県の手で木造の河田橋が架設されるとともに廃止されましたが、度々の洪水で橋が流失し、その都度渡船に戻ったこともありました。

しかし、昭和三三年、銀色に輝く永久橋「河田橋」の架橋により、河田渡船は幾百年の歴史にピリオドを打つことになりました。

②松倉渡船
松倉渡船の別名は牛子渡船。その昔、牛子（川島町松倉）は、美濃古市場から三井の渡しを経て尾張一宮に通ずる中街道沿いにあり、古くから栄えていました。戦国時代にはこれより上流八〇〇mの場所に松倉城があり、美濃攻略のため墨俣に築城するにあたって、この渡船場は重要な役割を果たしました。また、慶応三年（一八六七）の「小網島有来覚書記録」によれば、※お陰参りの様子が詳しく伝えられており、本曾川の舟運を利用し桑名を経て、伊勢路へ向かったようです。この当時の名残をとどめる史跡として、松倉町内の本曾川本流左岸に永代常夜燈が残されています。

この松倉渡船も昭和の幕開けとともに衰退の一途をたどり、昭和三七年、川島大橋が架橋される



松倉渡船跡



川島大橋

川島町は本曾川に浮かぶ川中島。かつては、渡船だけが唯一の交通機関でした。しかし、昭和以降の道路整備事業により、渡船も消えゆく運命に。橋梁の相次ぐ整備により、川島町の交通網は一段と強化されました。そして現在、個性豊かで快適な町づくりを目指して多彩なプロジェクトが着々と進行しています。

と、ついに廃止されました。※お陰参り：江戸時代、六〇年に一度行われた伊勢神宮への集団的参拝



笠田渡船

笠田渡船は別名、梅の木渡しともいわれ、米野（笠松町）に通じていました。美濃から尾張への間道渡船として古くから利用され、鎌倉時代に親鸞上人が通行したの、あまりにも有名な話です。以来、人馬の往来も多く、この地方屈指の渡船場として栄えてきました。しかし、大正十二年、本曾川上流改修が開始され、本曾川本流が笠田の北側から南側に移るとともに、現在の川島大橋下流約一〇〇mの地点に渡船場を移転させることになりました。しかしその一方、本曾川本流の増水でいつも渡船が中止になるなど、不便が続きました。

④わたり渡船
現在の川島町渡町と対岸の一宮市光明寺を結んだ渡船。光明寺には継舟問屋があり、地方物資の転売も行われ、川湊として栄えました。今からおよそ二八〇年前、享保（一七二六）の頃から伝わる毎年七月の水神祭りには、紅提灯で飾り立てたまきわら舟が本曾川に浮かび、その夜景はまさに十華一麗の一言。この地方を代表する郷土芸能の一つでした。

昭和十八年、木橋の完成によりわたり渡船は幕を閉じました。しかしこの木橋は、洪水で押し流されること



渡橋(南派川)

もしばしば。また河床内の取付道も跡形もなく流され、人々の不便は解消されませんでした。

昭和三九年十一月、ようやく多年の夢が叶えられ、建設省直轄の本曾川南派川改修工事の付帯工事に岐阜県工事を併せて、現在の永久橋わたり橋が完成しています。

●新しく生まれ変わる川島●

川とともに生き、川とともに暮らす川島の人々の暮らしは、昭和以降、橋梁が相次いで整備されると、その様相を一変させました。

渡し舟で行く花嫁御寮。学童を乗せて櫓をこぐ船頭さん。こうした川島ならではの風物詩も時代の流れとともに消えゆくことに。しかし、渡船に変わって登場した橋梁は、この町の暮らしに安全と豊かさをもたらしました。増水による渡船の欠航、岐阜市からわずか十km程の距離にありながら、本曾川の孤島と化した川島。水禍と闘った川島の歴史は、相次ぐ橋梁の整備や治水事業により、大きく変わろうとしています。

そして、二二世紀を眼前に控えた今日。川島町では、川中島という地理的環境を生かした町づくりに取り組んでいます。

平成三年から開始された第三次総合計画「全町公苑化のまちづくり」は、町を挙げての一大プロジェクトです。

この構想の基本となっているのが、川島町を取り巻く美しい自然です。計画の名が示すように川島町はさながら河の中に浮かぶ公苑。アユをはじめとする魚や二〇〇種にも及ぶ野鳥、河畔に生い茂るヨシハラやナギなど、恵まれた自然環境を生かしながら、豊かな地域文化を創造し、町全体の活性化を図る総合的な公苑化を目標としています。

従来、川島町は多種多彩の公園がある町。国営本曾三川公園三派川地区の施設

として笠田町内に昭和六三年「かさだ広場」がオープン。同公園事業の核として、まもなく、「世界淡水魚園」が建設される予定です。さらに、生産工場と公園的環境が結びつい先駆的な大手製薬会社の「川島工場」があります。これは「工園（インダストリアル・パーク）」という名称で表現されているように、公園の中にある工場。この他にも、ふるさとの森・スポーツ公園・桜づつみなど、個性あふれる施設が点在しています。こうした公園を有機的に結びつけ、快適な環境創出を図るのも計画の一環となっています。

●自然の景観を生かした川辺整備事業●

この公苑化計画のプロジェクトとして、川辺整備事業が行われています。この事業は、川に囲まれた「親水の町」川島の恵まれた好条件を最大限に生かすため、川辺を巡る周遊路の整備を目的とするものです。数キロに渡る桜並木や水辺にのびる階段、野鳥観察のためのスペースづくりや、ポケットパークなど、地域の特性を生かしたアイデアのもと、多彩な工事が進められています。



リバーサイドオアシス

リバーサイドオアシスは、川辺整備事業の一環として平成五年に着工されました。場所はわたり橋上流の高水敷。東屋をはじめ、象やキリンなどの遊具、花壇、芝生などがレイアウトされたポケットパークです。この憩いのスペースは、平成十生二月に完成する予定です。

●平成川島橋平成八年七月完成予定●

現在、川島町では岐阜県のマイロード事業が進められています。

マイロード事業とは、地域の個性と創意工夫を生かした地域振興施策に関連する道路整備を実施することにより、魅力と活力のある地域づくりを推進することを目的としたものです。ここ川島町では、建設予定の世界淡水魚園へのアクセス道路として、また東海北陸自動車道路の側道とした道路整備が進められています。

事業の概要は、川島町渡町を起点とし、岐阜市三輪までに至る道路延長一七・三kmに及ぶ幹線道路の整備です。

平成川島橋はその一環。野鳥を観察できるスペースづくりや、本曾川の流れをデザインした高欄、鳥をイメージした舗装タイルなど、川辺の修景を図ったモダンな意匠です。この平成川島橋は平成八年七月完成予定です。

このように川島町では「全町公苑化のまちづくり」を核とした多彩なプロジェクトが展開中。個性豊かで快適な町の実現は、もう間近です。



橋梁全景パース



展望バルコニー修景パース

参考文献
『川島町史』通史編 川島町発行
『ふる里かわしま』川島町発行
『ふる里の主な史跡と遺跡』川島町発行

特集

大正改修

第一編

木曾川上流改修、その前史

近代河川行政の確立を目指す明治政府は、明治四三年に「第一次治水計画」を策定し、本格的に大河川の改修工事を開始しました。この計画の対象の一つとなったのが、木曾川上流改修です。明治末期、木曾三川下流改修により三川分流を実現したものの、上流域は依然そのまま。出水の度、地元民の必死の水防活動により、かろうじて破堤を免れる状況でした。こうした木曾川上流域の抜本的改修が、大正十年に着工された木曾三川上流改修です。別名大正改修と呼ばれる上流改修は、官民双方の請願運動の末、いよいよ始動。その大正改修の全容を今回からシリーズで連載します。

■治水の消長に支配された濃尾平野の歴史

濃尾平野を貫流する木曾三川は、わが国でも有数の規模を誇る一大水系です。流域は長野・岐阜・滋賀・愛知・三重という五県に及ぶ広域なもの。豊かな水に恵まれたわが国における開発の最も進んだ河川で、その規模は関東地方の利根川、関西地方の淀川に比肩するといわれています。

この木曾川の開発の歴史は、そのまま東海地方の歴史。特に治水の消長に大きく支配されたといっても、過言ではありません。古くは天平宝字三年（七五九）解工使を派遣して木曾川筋を改修、また天長四年（八二七）には藤原朝臣高房が当時としては大規模な堤防を築造するなど、その歴史はまさに水との闘い、治水事業は時の権力者の使命だったといえます。

この木曾三川の特徴は、それぞれの源流が遠方向（木曾川は長野県木祖村の鉢盛山、長良川は



木曾三川改修の概観

六五河川としましたが、当時の財政力等から、これを第一期・第二期に区分し、第一期河川として利根川・木曾川・淀川などの二〇河川を選び、明治四四年以降順次着手することとしています。

この第一次治水計画で策定されたのが、木曾川上流改修です。しかし、内務省で調査測量に着手したのは大正六年のこと。その実施は大正末期まで待たねばなりません。

■上流改修を望む官民双方の声

上流改修については、すでに下流改修が始まる前後に地元からの要望の声が高まりつつありました。

まずは明治十九年十月。当時の岐阜県知事小崎利準は内務大臣山県有朋に早期改修を要請しています。これに対し内務省は「先ず、下流部の改修を実施した後で上流部の改修計画を立てるべきであり、その際には県で測量等の調査をしてもらいたい」という内容の通達を土木局長の名で出しています。この通達は、木曾三川の改修が一大事業のため、さらには下流の三川分流が急務であったため、上流部については当時の財政事情等の理由から着工を後にするといふもの。この一文からも、上流及び下流改修の一貫性をくみ取ることができます。

さらに、下流改修着手の翌年の明治二二年九月、小崎岐阜県知事は揖斐川上流部及びその支川の粕川・杭瀬川・敷川（現・根尾川）などの測量の実施や計画の策定を求めています。これは、旧藩時代に領主がそれぞれの地先で築堤していたため川幅も一定でないうえ、山林の乱伐で河床も上昇。輪中民は巨額の費用を投じていましたが、水害が絶えませんでした。更に輪中地帯の悪水排除にも悪影響へ及びます。このため上流及びその支流川改修は必須であったといえます。

こうした状況の中、民間における治水事業促進の動きも活発でした。

ています。

その後の大正七年にも悪水疎通を図るため、長良川の支流である境川に関する請願書を提出しています。

河川改修事業による悪水路への悪影響を懸念した反対運動は、上流改修実施後も引き継がれることとなりました。

■相次ぎ襲いかかる水禍

官民双方の請願運動は木曾三川下流改修の進捗と平行して、年々高まりをみせていきましたが、それに拍車をかけた要因の一つに明治時代における災害の頻発が挙げられます。

特に明治二〇年代、すなわち明治二一年から三〇年までの十年間には、死傷者が百名を越えた年が三回、家屋流出・崩壊が二千戸を越えた年が四回にも達しています。

また、明治二四年の濃尾震災を含めて連続して発生したこれらの大災害は住民を困窮させ、水害の後には赤痢などの伝染病をもたらし、さらに多くの人命を奪いました。こうした水害は明治三〇年以降も続き、明治四三年の武儀郡・益田郡の水害では、死者六二名を記録しています。

その一方、下流部では木曾三川下流改修の竣工により洪水の激減を実現したものの、改修区域よりも上流部では、河川の屈曲が激しく、川幅の広いところ、狭いところと一定しておらず、堤防も劣弱であるため、常に洪水の脅威を受けており、出水ごとに地元民の必死の水防活動によって、わずかに破堤を免れている状況でした。このような状況は諸地域の地元民に大きな不安を与えるだけでなく、木曾三川下流域にさえ悪影響を及ぼしかねません。

そうした趨勢の中、先述した第一次治水計画が明治四四年を初年度に発足しましたが、折からの日露戦争や物価上昇の影響を受け、繰り延べを余儀なくされました。

■大正改修、いよいよ始動



木曾川



揖斐川



忠節特殊堤(長良川左岸S62撮影)

相次ぐ水禍、盛り上がる請願運動を背景に、大正九年、いよいよ木曾川上流改修はその一歩を踏み出しました。木曾川上流改修予算二千万円（うち四分の一は地元予算）は通常議会に提出され、大正十年度より向こう十箇年継続費として可決されました。

改修の概要は、木曾川・長良川・揖斐川の下流改修区域から上流の河道部と数川、牧田川及び支派川の改修で、大正十年に着工したことから、大正改修とも呼ばれています。

木曾川の主な改修は、川島村（現岐阜県川島町）の河身を本川・南派川・北派川に支派川を整理するとともに、狭窄部の引堤掘削による河積の拡大と堤防拡張です。

長良川の主な改修は、上流部の長良橋辺りで分派し、合渡村（現岐阜市）で再び長良川に合流していた古川・古々川の締切と付替。本川では金華山から下流忠節橋までの岐阜市街区間に特殊堤を築造。またそれより下流では犀川に新水路を開削す

■参考文献

- 『木曾三川の治水史を語る』建設省中部地方建設局発行
- 『木曾三川に生きる』木曾三川水の文化の研究会発行
- 『木曾三川治水 百年のあゆみ』建設省中部地方建設局発行
- 『川島町史』通史編 川島町発行
- 『木曾川水系農業水利誌』（社）農業土木会発行
- 『木曾三川 その治水と利水』国土開発調査会発行

大正改修のあらまし

大正改修は、木曾三川の上流域の抜本的な河川改修です。大正十年からほぼ二十年の歳月をかけて行われました。この改修は各河川とも計画高水流量を安全に流下させるために必要な川幅を定め、湾曲の激しい箇所は整理し、川幅の狭い箇所については引堤を実施しています。本川改修と平行して、支派川改修も行われました。

歴史ドキュメント

長良川改修の道のり

西田 創氏

長良川改修は大正改修の大きな事業の一つ。当時、金華山北麓を流れていた長良川は、麓を離れると、長良川、古川、古々川の三筋に流れ、岐阜市の南西端で二つにまとめられていましたが、この三筋の流れを一筋に改修すれば、

治水上の効果は無論のこと、広大な土地活用も可能にしたからです。そうした長良川の改修について、岐阜市の西田創氏に語って頂きました。

略 歴	
生年月日	大正六年五月十四日
住 所	岐阜市在住
昭和14年3月	名古屋高等工業学校土木科 卒業
昭和27年8月	岐阜市役所入庁(土木部土木課)
昭和38年4月	土木部舗装課長
昭和44年8月	土木部長兼都市計画部長
昭和50年3月	岐阜市助役(S50.3~562.3)
昭和63年7月	岐阜市礼遇者
平成 2年4月	木曾三川水と文化の研究会代表
平成 2年7月	岐阜市水防協会顧問
日本技術士会会員	
技術士	建設部門 科学技術庁登録第22986号

◆上流改修の経緯◆

毎年のように水害に苦しんできた、則武・島・木田・河渡などの輪中に住む人たちは、水害の一番の原因である長良川・長良古々川を縮切してほしいと、郡や県に願ひ出た。この縮切り工事は、江戸時代から木田・則武・島の人たちが願ひでていたが、長良や福光・加納輪中の人たちの反対もあり実現しなかった。しかし、一〇〇年程前から、川北の輪中の人たちは力を合わせて縮切り工事の実現するよう、訴え続けた。

明治三十三年(一九〇〇年)木曾三川の下流改修(三川分流工事)工事が成功すると国会で上流



改修工事がとり上げられた。しかし、国はなかなか工事に着手することができなかった。たちましかねた川北村の人たち(川北水害予防組合)は、大正五年(一九一六年)川南の岐阜市や稲葉郡の村の人たち(岐阜市・稲葉郡用排水

普通水理組合)と協力し合い、県知事と県議会にお願いし、国会の議員の方々に応援をたのみ、早く工事を行うよう国へ要望した。国は、次の年から調査を始め、一九二一年から工事に着手し、長良川石岸即ち川北には、昭和八年(一九三三年)から工事にかけた。川北の人たちが、長年に渡って願ひ続けた縮切り工事は昭和十四年(一九三九年)ついに完成した。

◆長良川改修の概要◆

木曾川下流改修工事が竣工すると、大正一〇年に着工した上流改修工事では長



大正時期の長良川



現在の長良川

長良川の本化ができる、昭和十四年八月から古川・古々川の分派口の縮切りに着工した。一八年には上流改修の大部分が完成した。

長良川の改修は、引堤が主であるが、河道の整備も大切で、護岸や水制を整える工事も併せ進められた。

今一つ重要工事である長良川と古川の合流点の付替工事は、古川を二二〇〇m下流の寺田地区で合流させるもので、昭和九年着工し、昭和十五年八月にはほぼ工事が仕上がった。

◆引堤と縮切◆

①島地区の引堤と古川・古々川の分派口の縮切り。

古川・古々川を縮切り、長良川を一筋の川にする計画が、長良川上流改修計画の中心(要)として決定され、昭和八年から国の工事として始められた。重要な工事は、岐阜市江口から上流の長良橋までの約五六〇〇mにわたる長良川右岸側の堤防築造である。



今の堤防と昔の堤防(早田岩倉付近)

そのなかに、洪水時には長良川の水が古川・古々川へ派流するその分派口を遮断する改修の主目的の築堤工事が含まれているからである。分派口付近から下流へ長良川本川の川巾を拡大させるため、本川の右岸堤防を平均して二〇〇m北へ移して堤防を新しく築いた。その規模は、忠節橋付近の川巾を一七三mから二六六mに堤防敷を拡大し、高さは1.5倍という大工事である。金峯橋の所では二二〇mを三〇二mに拡げた。

なお、引堤に当たつてこの地域の方々の協力を忘れてはならない。当時の揖斐線の忠節驛を始め、島・早田地区で約三〇〇

戸に近い民家の立ち退きが必要とし、又多くの耕地も水没することとなった。

②古川の付替工事

古川の付替工事を行うため古川の下流部は、延長約二〇〇〇mの新川を開削し、兩岸に新堤を築き、法先に護岸を施し、洪水の疎通を図った。上流部は、県道尻毛橋まで在来堤を拡幅した。

工事は、昭和九年一〇月から掘削と併行して護岸と築堤工事を進め、昭和十五年三月に掘削は完了し、同年八月には護岸も完成した。新堤の築造も大部分完成したので、古川は新堤へ切り落とした。その後戦争の影響で遅々として工事は進行しなかったが、昭和十五年四月に至り、上流部の新川付替箇所縮切り工事に着手し、護岸と併行して築堤施工し、翌二六年ようやく古川合流点の付替工事を完成した。一方、一日市場地先の古川合流点の縮切り工事は、寺田地先の新古川合流点の付替工事完成の見通しがついた昭和二十五年九月に縮切り、樋門に着手し、翌二六年三月完成した。引続き護岸工事に着手し、昭和二十七年にすべて完成した。

この一連の改修によって、尻毛橋付近は洪水位に於て約一・五m、平水位に於て約一・〇m低下するようになり、かつ上流の板屋川・鳥羽川・伊自良川の諸川の沿岸に多大の効果をもたらした。

以上、

岐阜市域周辺の改修工事の完成により入り乱れていた河道は是正され、昔の面目を一新し、岐阜市北部一帯は水害の脅威を免れることがで



長良川左岸特殊堤工事

きるようになった。

③岐阜市の特殊堤

長良川に架かる忠節橋より上流(金華山に至る延長約二四〇〇m(左岸堤防))の築堤工事は、関心の的であった。このところは、岐阜市の首筋ともいえる重要な箇所であつて、出水の際は大脅威を与えるばかりでなく、万一破堤ともなればその影響地域は岐阜市・加納輪中約四〇〇〇haに及び、なお、場合によっては境川を突破して羽島郡内に及ぶと予想され、被害が莫大になるので、特に完璧を期する必要があつた。しかし、普通の土堤防に拡築すれば、市街地の土地買収、家屋の移転など容易でなく、其の上築堤土砂が付近の高水敷になく、遠距離の運搬となり、更に工費を比較しても、大きな差益があるなどにより、これを特殊堤として施工した。特殊堤は、川表は練積玉石張を施し、下流部はコンクリートの角落工を設けて万一の水防に備え上流部はコンクリート壁とした。

なお、水衝部に護岸を施し、一層堤防の補強に努めることとし、低水路の川岸に接する所には合量水制を設け、水流の是正を図った。この工事は、昭和二年着工し、昭和十五年に完成した。又、金華山の取付部延長四一〇m及び忠節橋取付部延長一五六米は、昭和二十四年八月着工し、昭和二十六年三月完成した。以上の河川改修の結果、

廃川敷二六〇町を生み出した。そしてこの地方に戦後次々に学校等が建ち、住宅街が整備された。さらに、昭和六三年ぎふ中部未来博の主会場と企画され、

これを完成させたことは記憶に新しい。ついで、平成七年には長良川国際会議場が完成した。岐阜市北部のこの地域に(昭



長良川国際会議場メモリアルセンター付近(長良古川の流路)

長良川は木曾川の一支出流として、岐阜市域では、長良古川・長良古々川(以下古川・古々川と言ふ)の分派口縮切り及び古川合流点の下流への付け替え



長良古川・長良古々川縮切り付近略図

など、大工事を含んでいた。当時、金華山の北麓を洗っていた長良川は、麓を離れると古々川・古川・井川(新川ともいうが現在の長良川)の三筋に分れて流れ、岐阜市の西南端で再び二つにまとめられたおよそ自然状態にある川は、昔から過去に何回もの流路の変化を繰り返しながらきており、それぞれの方向に扇状地やデルタを形造つてきた。

従つて河道の移り変わりは洪水によって起る必然的な結果ともいえるよう。このため、『二筋の川にするには、三地区の住民にとつても、市民全体にしても重大関心事であつた。長良川の右岸と左岸の住民感情が相反する。結局、内務省の直轄事業として、木曾川上流改修計画に包括されることに決定した。そしてその治水計画に基づいて、古川・古々川の分派口を縮切ることになった。新川筋を生かす。新川筋を強化し、整備し、堤防を堅固に増築することに決定し、実施することになった。』忠節橋から上流の左岸は、市街地に接しているために、堤敷が拡げられないので、コンクリートや石で固めた「特殊堤」を造ることとした。左岸に特殊堤を築くため、右岸は平均して一〇〇m引堤した。川幅は広くなり、堤は広大となった。人力や機械力を投入して昭和九年から一四年までかかった。

和の初めまで河原であり毎年洪水と闘ってきた。長良川国際会議場メモリアルセンター・長良川スポーツプラザ・県民文化ホール・未来会館と約三〇〇haの空間に性格のことなる施設が順次完成集積し、「世界イベント村ぎふ」が誕生した。このように目ざましい発展を遂げ昔の面影を一変させた。

BOOK LAND

木曾三川に生きる

川の歴史を知る

—長良川改修の道のり—

■編集・発行
木曾三川水と文化の研究会
代表 西田 創 (非売品)



副題「長良川改修の道のり」が示すように、長良川流域に暮らす人々の水防活動の足跡をあらゆる視点から切りとった一冊。濃尾平野の形成や木曾三川の流路の変貌などの地理的背景や、洪水の歴史、治水活動の状況が網羅されている。なお、輪中の史的探究(抜粋)がのせてある。

中でも興味深いのは、第十章の「長良川上流改修見聞録」。これは、長良川改修(木曾川上流改修の一環として行われた工事)当時、二十五歳であった北川偵治氏が長良川右岸の引堤に関わる日々を綴つたもの。決して史実に現れることのない、地元民の目から見た改修の実録である。

民話の小箱 ヤロカの大水

川島町

むかし、むかしのことです。

連日の大雨続きで昼なお暗く、村の人々は憎らしげに空を見上げながらつぶやいていました。「困ったことじゃ。いつになったら雨は降りやむんやろ。」

このぶんやと、また堤防が切れるかもしれん。

「この前の大水で床の上まで水浸しになったばかりなのに、神様はわしらをみはなしたんやろか」

雨足はますます激しくなるばかりです。村中の道は、まるで小さな川のように水があふれかたがり、畑のうねも水浸し。

木曾川の主流では赤い濁りの水が狂ったように波濤をたてて流れています。

「カン、カン、カン、カン……」

そんな夜、洪水を知らせる半鐘が村中に鳴り響きました。

村人たちは、みのかさに身をこめ、降りしきる雨の中、堤防へ急ぎます。

濁流が堤防を越えたら、畑も田も、生命財產を奪われてしまう。

駆けつけた村人は、俄に土をつめ、それを蹴りまくります。

牙をむいて襲いかかる大水から村を守るため、

必死になって土をつくりまくります。

と、そのうち暗黒の雲の中から激しい雷音とともに、

不気味な声が聞こえてきました。

「ヤロカー、ヤロカー、水ヤロ」

あたりに響きわたるその声は、まるで地獄のうめき声。

「わしにも聞こえた」

村人たちは小声でささやきながら、

恐ろしさでうち震えていました。

あまりの恐怖から、気の小さな子供も大声で叫びはじめました。

「ヨコサバヨコセー」

すると、恐ろしい雷鳴とともに、

それこそ盆をひっくり返したような大雨が降りました。

川水は津波のようにふくれあがって、

たちどころに堤防を押し流してしまいました。

まるで竜の化身のように暴れ狂う大水、

濁流は田や畑はもちろんのこと、

人や馬、人さえもあつというまに呑み込んでしまいました。

あたり一面は泥海と化したのです。

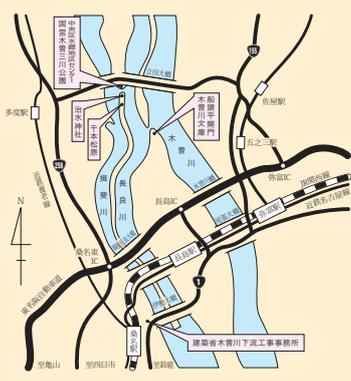
この「ヤロカの大水」は木曾川流域に伝わる伝説で、江戸時代の初期、貞享四年（一六八七）八月の大洪水だとされています。

「ヤロカ」とは恐ろしい洪水に対するうめきの声。

「水ヤロカ」の声は人間が恐怖に直面して極限の言葉といわれています。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》 午前9時～午後4時30分
《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》 無料
《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分
 名神羽島ICから車で約30分
 東名阪長島ICから車で約10分
《お問い合わせ》
 船頭平閘門管理所・木曾川文庫
 〒496 愛知県海部郡立田村福原
 TEL(0567)24-6233



編集後記

「木曾三川連合水防演習」のお知らせ
 会場／三重県長島町押付地先
 木曾川右岸のJR関西線西詰上流
 日時／5月25日(土)AM8:30
 梅雨や台風による出水時の水防及び防災態勢の強化を図るため、水防団などの参加で演習が行われます。災害に対する普段からの備えの大切さをご理解頂くため、ぜひ、演習の見学にお出かけください。編集部では皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。宛て先は、木曾川文庫まで。
 Vol.18 編集にあたっては、川島町と西田創先生にご協力をいただきました。ありがとうございます。次回は岐阜県穂積町を特集します。ご期待ください。

●表紙写真●
 上：河跡湖畔に咲く桜（私倉町側の堤防）
 中：アマザキ（夏鳥）下：アユ漁をする漁師たち